

## 〇〇 ま え が き

日本では、四季を通じ気候風土、自然の山河草木等に恵まれて、地域に根づく自然素材による最適と思われる家造り、「木の家に住む」発展や改良により、伝統的(要素)技術(匠人)により伝統的木造建築が生まれた。

特に第二次大戦にて焦土と化し、戦後復興の爲また一方では鉄筋コンクリート造や鉄骨造や木材の自給自足ができず海外からの輸入材でまかない、木材の供給国の事情も絡んでツーバイフオ工法によるプレハブ住宅等が台頭し、特に在来軸組工法の木造住宅がおびやされてきた。

幸いにして「木の見直し」の気運が高まり、木造による三階建ても可能となり、また木材の積層材や木製の合成梁による大空間の建造物も建てられるようになった。要は、「木に対するかなりの誤解」が解けたし、「再認識」されたといえよう。

「木は生きている」そして、「人も生きている」・「人の知恵を活かす」

木造(軸組)住宅は、鉄骨造・鉄筋コンクリート造・鉄骨鉄筋コンクリート造のような建築物に比べ、似て非なるところが多い。たとえ有資格者だろうが、また鉄骨造や鉄筋コンクリート造の設設者や現場に長年従事したベテラン技術者とはいえ、

木造に弱い人が意外と多い。なかでも木工事における「木材の一本拾い・必要な長さ」などに不得意である。また必要長さ(割合短尺や乱尺が多い)を算出することにより木材(資源)のむだをなくすることができる。現に、相当のキャリアのある建築士の人々が自分はほとんど手を出さずにいるのを見かける。つまり木造に強い仲間や知人に〈ソツト〉設計(構造)をたのんだり、見積書(積算)の作成や査定を依頼している。このように木造軸組住宅の構造図や積算(一本拾い)というものは、結構やっかいて面倒なもののように考えられがちであるのが現状である。

★木造(軸組)住宅の設計図書の順位は、①基本図書。②構造図書。

③意匠図書(仕上げ詳細図等)。④設備関係図書その他。以上の順位でなければならない。鉄骨造・鉄筋コンクリート造などやツーバイフオ工法のプレハブ住宅では設計図書の順位は①・③・②・④となっている。

★基本的な平面図や伏図の書き方は、構造材を加工し組立てには記号(番付)をする面を、字表(じおもて)、字面(じうら)、と謂。建物正面や玄関面を設計図面の下部(手前)とすることを基本とすること。

★一般的な住宅計画の基準に付いて、住宅の生活空間を二つに大別して考えると、居室部位と諸機能部位の二つと考え、計画設計にあたって、居室部位と諸機能部位の割合を、1対1の割合(各々1/2)が一般的であると考えられる。

なお、納戸、押入、物置、クローゼット、などの必要面積は延床面積の15%強位は考えておくことが必要である。